

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：22302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770286

研究課題名(和文)変容する都市郊外空間と地域「参加」にみる住民のジェンダー再構築

研究課題名(英文)Transforming suburban spaces and reconstructing gender roles through community participation

研究代表者

関村 オリエ (Sekimura, Orié)

群馬県立女子大学・文学部・准教授

研究者番号：70572478

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、高度経済成長期に誕生した計画的な都市郊外空間の変容と、そこに展開される住民の日常生活における実践を、男女の性別役割分業といったジェンダーの視点から明らかにすることである。少子高齢化や自治体財政の緊縮化などで転機を迎える郊外空間においては、「男性＝勤め/女性＝家事・育児」といった近代核家族の概念に下支えされた性別役割分業が終焉を迎えつつある。本研究では、こうした過渡期にある郊外空間を、これまで看過されてきた住民のジェンダー役割の再構築をめぐる日常実践、特に、女性や高齢者に期待される地域への「参加」に注目をしながら明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study elucidates the transformation of suburban spaces developed during Japan's rapid economic growth period from the gender perspective, focusing on the residents of such spaces who are actively involved in their local communities. The Japanese urban spatial structure has been characterized by a clear division of gender roles wherein men work salaried jobs in the city center while women engage in household works and child care in the suburbs. However, these suburban spaces are currently undergoing a transformation after their development. With these spaces currently facing stagnation in population growth and an aging population, the traditional gender roles supported by the nuclear family of the Japanese postwar era are now coming to an end. In this study, the author examines such processes of transformation in suburban spaces from the gender perspective, especially focusing on the daily practices of local residents to reconstruct gender roles.

研究分野：人文地理学

キーワード：都市郊外空間 住民 参加 ジェンダー 人文地理学

### 1. 研究開始当初の背景

戦後の高度経済成長期の日本では、職住分離の都市計画を背景に、都市空間では生産機能に特化した都心空間に対して、労働力の再生産に特化した計画的な郊外空間が形成された。この都市構造は、稼ぎ手としての夫と、それを専業主婦として支える妻というジェンダー役割分業によって下支えされ、近代核家族イデオロギーに強化されてきた。しかし近年では、住居や公的施設等の建造環境老朽化、人口や都市機能の都心回帰、さらには、人口減少にともなう都市空間そのものの縮小化傾向によって、戦後以降つくりあげられてきたジェンダー役割に基づいた都市構造は過渡期を迎えつつある。特に、これを色濃く反映してきた郊外空間では、固定的なジェンダー役割の限界も顕在化しており、地域住民の生活そのものの維持が危ぶまれる状況も生まれている。ジェンダーと変容する郊外空間は、日本の都市空間を考える上で重要な課題のひとつであると考えた。

### 2. 研究の目的

上記のような背景のもと、近年、変容する郊外空間では新しい状況が生じつつある。それは、郊外空間の住民たちが、職住分離の構造を支えてきた空間秩序（特に、ジェンダー秩序）に対して、これまでとは異なる形でコミットする動きを見せていることである。だが、これまでの地理学研究の中では、戦後続いてきた都市空間のジェンダー秩序を「前提」とした研究が展開されてきたため、空間構築の行為主体である住民たちの動きを十分に掬い取ってこなかった。

こうしたこと背景には、郊外空間を扱う多くの研究が、集合体としての住民主体を前提としてきたこと、つまりマクロ（群）の視点からしか郊外空間の地域特性を捉えてこなかったことがある。だが事実、人口の少子高齢化や、自治体財政の緊縮化等で転機を迎え、変容する郊外空間は、地域社会や家庭の場を中心としてミクロ（個）に作用しているのである（吉田 2006）。また、「生産＝男性／再生産＝女性」といった既存の文化・社会的役割を越えて、新しい空間秩序を構築しようとする、個々の住民たちの動きを検討するためには、ジェンダー視点の導入が不可欠である。そこで本研究では、郊外空間における住民の地域「参加」、そしてその中でダイナミックに変化しつつある既存のジェンダー役割の再構築に焦点を当てた。

### 3. 研究の方法

先述のとおり、本研究の目的は、高度経済成長期に誕生した計画的空間である、都市郊外空間の変容と、そこに展開される住民の日常生活における実践を、文化的・社会的な性別役割に切り込む、ジェンダーの視点から検討しながら考察を加えることにある。現在、少子高齢化、グローバル化、財政の緊縮化等

を背景として変容する郊外空間では、近代核家族のイデオロギーが空間を形成する上での中心的基盤となってきたが、このイデオロギーの前提条件が崩れつつある。このため、郊外空間の生活に求められてきた性別役割分業が終焉を迎えている。本研究では、このような郊外空間の変容過程を、従来見過ごされてきた住民のジェンダー役割とその再編をめぐる日常実践といった点に注目しながら、質的、量的なアプローチを用いて検討しようとするものである。さらには、空間の変容の結果として、女性や高齢者等に期待されている住民による地域への「参加」がもつ意味と課題についても検討した。

### 4. 研究成果

#### (1) 関心へのアプローチ

本研究では、日々刻々と変容する郊外空間を浮き彫りとするために、都市空間のリストラクチャリングにおける地域のさまざまな担い手の可視化を目指した。また、彼・彼女たちが直面する課題を明らかにするために、空間のリストラクチャリング過程における住民の地域「参加」の議論を、ジェンダー地理学に包摂させることを目指す、新たな研究の遂行を試みた。

具体的な方法としては、まず以下に示す「事例研究 a」で、建造環境の老朽化・陳腐化、同時に人口の少子高齢化がみられた大阪府の千里ニュータウンを取り上げ、公共サービスのアウトソーシングの中で、重要な役割を担うようになった住民による、地域の「参加」を取り巻く問題を明らかにした（図 1）。本研究では、同時代に建造された東京都多摩ニュータウンの事例との比較から、グローバル化時代、新自由主義経済時代において、大規模ニュータウンが直面している問題群について整理し、分析・検討を行った。

次に、「事例研究 b」では、同じく日本の高度経済成長期に創り上げられた大規模住宅団地の変容を考えるために、引き続き千里ニュータウンにおける地域の状況を取り上げ、地域の新しい生活者となりつつある転入世



図1 研究対象地域:千里ニュータウン (著者作成)



足や委託を請け負う人々の過重負担が深刻な状況にあった。

本研究では、対象地域において、その一例として挙げられる学校組織を中心とした活動に注目し、検討した。地元の協力を得て配布・回収を行ったアンケートによれば、活動の中心的動機にも関わらず、地域における協働や問題に対する働きは、公的な支援は十分に受けているとは言いがたく、地域「参加」の持続性の問題が懸念された。千里ニュータウンをはじめとし、公共空間の中で展開される協働事業の多くが、住民をはじめとした行為主体の自助努力に依拠している。実際に、厳しい行財政状況の中で、これらの穴埋めをするための地域「参加」を支えるのは、あくまで住民たちの意欲とボランティアな精神に他ならないことも指摘できる。

また、公共空間の私化の中で、実質的な担い手となり、結果として過重負担を負っているのは、やはり女性たちであったことは見逃せない。教育や子育てサービスをめぐっては、公的サービスの拡充ではなく、近年、むしろ家庭・家族に求めるところが多く、家庭内役割を担う母親たちに不利な状況を招いていることがわかった。本研究からは、住民のインフォーマルな資源に依拠する地域協働のメカニズムと、そこに関わる住民の負担の所在が解明され、今後、これらを踏まえ、ジェンダー化された地域の議論をさらに深化させる必要がある。

#### (4) 成果2: 「オールドタウン」への回帰? - 地域への「参加」から見えてきたもの -

都市郊外空間を支えてきた、日本型雇用モデルが終焉を迎えた現在において、既存の価値観を乗り越えて地域に「参加」する人々の姿を分析・検討した。住民たちの多くは、千里ニュータウン内の再開発により新たに建設された分譲マンションに移り住み、地元で子育てを行い、ニュータウンの内外で仕事や地域活動に従事する。彼・彼女たちの中には、(主に夫の)転勤を契機に近畿圏や全国から千里ニュータウンへと転居してきた「転勤族」の世帯が少なくない。

夫の転勤をきっかけとして、ニュータウンで暮らす女性たちは、とりわけ地域への関心が強い。特に、学校のPTA活動や学校区域を中心として発生したインフォーマルな子育てネットワークは、子どものクラスメートや学童仲間、習い事仲間等、母親たちが関わる人間関係により重層的に織りなされている。加えて、彼女たちの中には、教育や育児などあらゆる分野への関心から、NPO等を立ち上げ活動する女性もおり、さまざまな形で地域にコミットしていた。いずれにせよ、住民(特に、女性たち)がニュータウンの地域社会の基盤形成に大きく寄与しており、郊外空間の変容にともない、地域において新たな存在感を持ち始めている。

本研究で実施したインタビュー調査やア

ンケート調査では、地域や公共空間での実践者になりつつある母親たちにニュータウンへの転入経緯や職業経歴、主に家庭を中心とした家事・子育ての状況を尋ねた(表1)。

表1 インタビューした母親たちの属性(一部)

母親	結婚前	結婚・育児	育児後
A(42)	百貨店(フルタイム)		ファーストフード(パート)
B(43)	印刷会社(フルタイム)		医療関係受付(パート)
C(42)	文具会社(フルタイム)		弁当店(パート)
D(41)	証券会社(フルタイム)		学習塾(パート)
E(51)	電気会社(フルタイム)		カタログ配送(パート)
F(40)	電気会社(フルタイム)		電気会社(産休利用)
G(42)	不動産(フルタイム)		コールセンター(派遣社員)

(出典:インタビュー調査)

転入してきた世帯の多くの女性たちは、結婚や出産を契機に大学・短大から勤務していた前職を離れ、およそ10年専業主婦として家事・子育てに従事した後、ニュータウン近隣や駅前等の職場において、再び賃金労働を行っていた。夫の転勤において新たに郊外ニュータウンの住民となった女性たちは、労働の場に復帰しながらも、学校を軸としたネットワークによって結びつきながら、地域にさまざまな形でコミットすることで、職場と地域を接合した暮らし方の実現、そこでの自身の生きがいを志向していたのである。

だが、彼女たちは、夫に対しての家計補助的な稼ぎ手としての役割や、家庭・子育ての責任を負う限定性も受け入れている。彼女たちの多くの世帯は、ホワイトカラーの夫を稼ぎ手として持つ核家族である。そして、彼女たちの殆どが、結婚・出産と同時に退職し、夫の都合により現在の地域へ転居した経緯を持つ。事実、彼女たちの夫は、結婚以来、職場の転勤を受け、常に長時間労働に従事し、一家の「稼ぎ手」としての役割を担い続けている。女性たちからは、「(子育てを夫に期待することの)諦め」や「(夫に対する)同情」の声すらも聞かれ、二元論的イデオロギーに下支えされた性別役割分業の影も伺えた。

日本型雇用慣行が終焉を迎えている現在、郊外ニュータウンでは、伝統的な性別役割分業に基づく家族観、家族関係も再生産されている側面も否定できず、多様な人々が、オルタナティブな生き方を実現するための空間として再編成されるのかを、今後さらに検討する必要がある。

#### (5) 成果3: 郊外空間と父親・男性たち

人口の少子高齢化、経済・文化のグローバル化にともない、都市のリストラクチャリング、公共空間の私化(プラバタイゼーション)が急速に進む中で、郊外空間は徐々にその姿を変えている。変容する郊外空間においては、個(私)は、地域という場を通じて、行政(公)と直接対峙するに至った。近年の住民「参加」は、公と私を直接的なものとし、公領域に対する私(個人)の意思決定を可能にさせ、官と民の水平的なつながりを実現させているのである。

そして本研究では、住民たちの活動実践が、空間の秩序となってきたジェンダー役割分業の仕組みや規範を乗り越える可能性を持つことを明らかにしてきた。だが、ジェンダー秩序の再編を求める住民たちの実践が、既存の家族内役割を前提とした二重負担を伴いながら達成されていることや、それら実践主体の多くが女性たちに限定されていることも明らかとなった。さらには、男性たちの家庭における「不在」、再生産労働に対する男性（社会）の「変わらなさ」が深刻な問題として浮かび上がってきた（図3）。

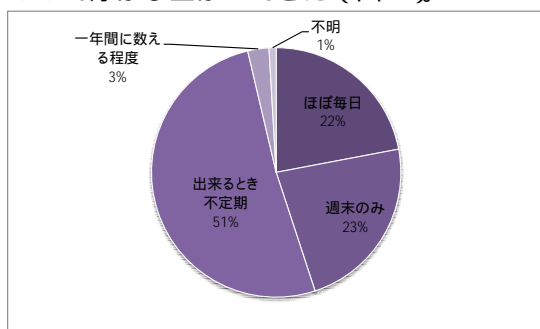


図3 夫の子育て「参加」頻度 (n=218)

(出典: アンケート調査)

確かに、本研究で実施したアンケート等からは、家庭・地域における父親の家事・子育て関与も確認されたが、そもそも彼らはこうした場において「補助的役割」にとどまり、自らのジェンダー役割を脱構築しながら再生産労働を主体的に担い関わるまでには及んでいなかったのである。

空間の構築には、女性のみならず男性もまた大きく関与している。ゆえに、そこに潜む性別の権力関係を検討する際に、男性が不在のまま議論が進むこと自体、問われるべき権力関係の再生産を促す危険性も孕んでいる。今後、郊外空間と地域「参加」の議論は、住民の活動実践の持続可能性とその課題を適切に解明するために、過重な負担のしわ寄せを受ける主体をジェンダー視点から可視化してゆく必要がある。そのためには、家庭・地域という領域において、これまであまり配慮されてこなかった「男性性」という切り口は不可欠であり、エスニシティ、階級といった視点を交差しながら、さらに踏み込んだ議論を行う必要がある。

#### 〔引用文献〕

吉田容子, 「郊外空間のジェンダー化」, 地理科学 61, 200-209, 2006.

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

Orie Sekimura, Living in Suburban New Town: Examination from Life-stories of "Transfer tribe" women, *Bulletin of Gunma Prefectural Women's University*, Gunma Prefectural Women's University, No.38, pp.129-137, 2017. (査読無)

Orie Sekimura, Reconstruction of retirees' masculine identity in Japanese suburban communities: an examination of their life stories, "33rd International Geographical Congress, Beijing, Book of abstracts", International Geographical Union Regional Conference, p.705, 2015. (査読有)

Orie Sekimura, New Towns Turning into Old Towns: A case study of two major suburban New Towns in Japan, *Building Global Networks through Local Sensitivities: Japanese Researchers' Contribution to "Gender and Geography"*, International Geographical Congress in Kyoto and Pre-conference in Nara, pp.24-34, 2015. (査読有)

関村オリエ, 「都市郊外空間の変容と住民の地域参加に関する一考察 - ジェンダーの視点から - 」, 『群馬県立女子大紀要』, 群馬県立女子大学, 第 35 巻, pp.131-142, 2014. (査読無)

関村オリエ, 「中心市街地の空洞化と移住者促進に向けた空き家活用のゆくえ 群馬県桐生市を事例に」, 『平成 26 年度特定教育・研究費事業成果報告書』, 群馬県, pp.1-8, 2014. (査読無)

〔学会発表〕(計 3 件)

関村オリエ, 「成熟」したまちを目指して - 群馬県桐生市の事例 - . 群馬県公開講座, 群馬, 2016 年 11 月.

Orie Sekimura, Reconstruction of retirees' masculine identity in Japanese suburban communities: an examination of their life stories, "33rd International Geographical Congress, Beijing, International Geographical Union Regional Conference, p.705, August, 2015.

関村オリエ, 「子育て」は誰が担うのか? - ライフストーリーから考える、郊外コミュニティの再生産労働問題 - , 人文地理学会, 大阪, 2015 年 11 月.

〔図書〕(計 1 件)

関村オリエ, 郊外住宅団地の行方 (第 4 章 73-95 頁). 井上 孝・渡辺真知子編 『首都圏の高齢化』 原書房, 2014, pp.73-95.

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

関村 オリエ (SEKIMURA Orie)  
群馬県立女子大学・文学部・准教授  
研究者番号: 70572478